

【姫路市立広畑第二幼稚園】の取組

1 テーマ

遊びの中の学びを探る

～主体的・対話的に学び合う 共につくる環境とは～

2 テーマ設定の理由

幼児期の生活のほとんどは遊びで占められている。幼児教育は、自発的な活動である遊びを通して総合的に指導する教育である。自発的な活動としての遊びの中に、学びが広がったり深まったりする体験やきっかけが含まれており、教師は幼児の活動を細やかに読み取る必要がある。また、幼児が自分なりの方法やペースで試行錯誤できる時間と空間を保障することも重要であり、それらのことが学びの過程や質の高まりにつながっていくものとする。また、幼児が遊びの中で周りの環境にどのように関わり、何を学んでいるのかを探り、一人一人の成長を促すことも重要であるとする。

本園の幼児は自発的な活動としての遊びは見られるが、自分たちの問題として「こうしたい」という主体的な学びが実現できているのか、自分の思いを表現し、考えを出し合う対話的な学びが実現できているのか、今日の遊びが明日の遊びにつながる学び合いが実現できているのかと考えたとき、十分とは言えないこともある。また、教師は目の前の幼児と向き合いつつも、教師がお膳立てした環境の中での遊びとなっていないだろうかと省察した。

そこで教師は、幼児の声を聴き、内面を読み取ったりしながら幼児と一緒に環境をつくり、幼児の思いを実現させるために共に考え合ったりし、幼児が生活や遊びに主体的に参画できるよう、自身の保育を見直し、資質・能力を高めていくことが、幼児の主体的・対話的な学びにつながるのではないかと考え、テーマを設定した。

3 研究経過

(1) 1年次(令和3年度)の取組

①1年次研究テーマについて話し合い、共通理解する。

サブテーマ～主体的・対話的な学びを深める環境とは～

②桃山学院教育大学 名須川知子教授を招聘して公開保育をし、共につくる環境について考える。

③主体的・対話的な学びを深める環境に関する視点で、遊びや活動を抽出する。

○幼稚園教育要領の5領域別に分類

5領域	環境に関する視点	遊びや活動内容
健康	<ul style="list-style-type: none">・思い切り体を動かして遊べる環境・多様な動き(走る、登る、くぐる等)が経験できる環境・衣食住などの生活の心地よさ、整理整頓や片付けしやすい環境・安全に配慮した環境	<ul style="list-style-type: none">・チャレンジタイム(竹馬、パカポコ、縄跳び)固定遊具、三輪車、スケーター、サッカー、リレー・サーキット遊び、体操ダンス・コーナー遊び(ままごと、製作)

人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で自分のしたい遊びをじっくりできる環境 ・少人数の子どもで遊び込める環境 ・友達と共通のテーマもって協力して遊べる環境 ・地域に出向くなど、多様な人や資源と関わる環境 	<ul style="list-style-type: none"> ・選んで遊ぶ時間の確保 ・共通の目的に向けた学級活動 ・なかよしペア(異年齢交流) ・小学校へお遣い作戦
環境	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な自然(植物や生き物等)と親しめる環境 ・物の性質や仕組みなど、科学的事象に興味や関心をもつような環境 ・遊びや生活の中で、数量や図形などに関心をもつような環境 ・季節による自然や文化に親しめるような環境 	<ul style="list-style-type: none"> ・園内外の虫や生き物の飼育 ・ウサギのエサ当番 ・季節の花や野菜作り ・園外保育(広高浜公園、小坂公園) ・老人クラブと昔遊び
言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が感じたこと、考えたことを話すことが保障できる環境 ・クラスで話し合うことができるミーティングの環境 ・様々な絵本や物語に出会い、言葉のおもしろさを経験したり、表現できたりする環境 ・遊びや生活の中で、文字に対する関心ももてる環境 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの中で伝え合い ・学級で振り返りタイム ・共につくるドキュメンテーション ・絵本の読み聞かせ
表現	<ul style="list-style-type: none"> ・五感を通して心が動くような感動する経験をする環境 ・感じたことや考えたことを、かいたりつくったりすることができる環境 ・感じたことや考えたことを音や動きで表現できる環境 ・感じたことや考えたことを日常的に表現できる環境 	<ul style="list-style-type: none"> ・見る、聞く、触れる、匂う、味わう直接体験 ・絵画活動、製作活動 ・音楽活動、表現遊び ・ダンス体操等身体表現

④事例研究をする。(遊びを通して幼児が学んでいる過程が、ふさわしい環境・伝え合える環境であったか省察)

(2) 2年次(令和4年度)の取組

①共につくる環境について考察し、共通理解をする。

「人」「物」「場」「時間」「季節」「地域」「行事」など

②記録の取り方の見直しを図る。

日々の保育の振り返りと週案のあり方を見直すために、これまでの週案の様式について協議した。事前の週案は、形式的で担任個人のためのものになってしまっている。また、次週に生かしていないなどの課題があがった。そこで、幼児の主体的・対話的な遊びの様子や姿に視点を置いたエピソード記録を書き、次週へのつながりや、振り返った時に幼児の育ちが分かるように改善していった。また、一日ごとに教師の関わりについて自己評価を付けた。そして、職員間で記録を共有し幼児理解及び学級の取組について共通理解を図った。

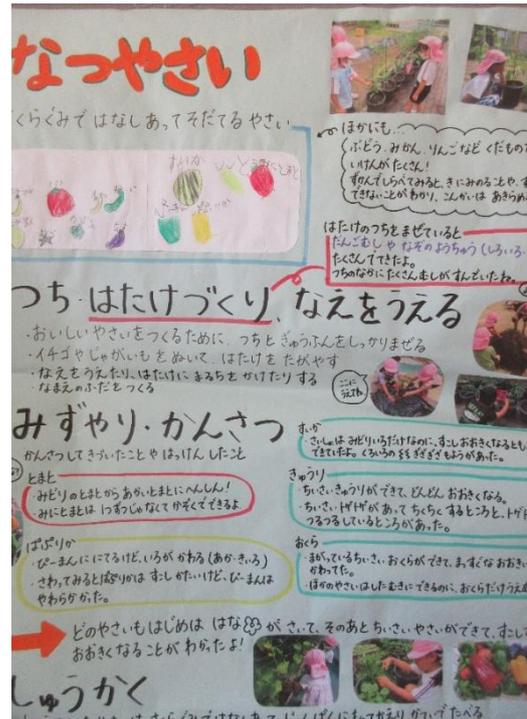
③共につくるドキュメンテーションの作成

幼児の活動写真を記録として捉えるのではなく、写真を盛り込んだドキュメンテーションを、幼児と共につくり進めることで、幼児主体の遊びや活動を生み出す手段にしたいと考えた。学級で一つのテーマを振り返りながら幼児の姿や声を可視化していくことで、幼児同士で共有されると同時に次への見通しとなり、幼児の主体的・対話的な学びにつながるツールとした。

【4歳児 4月～6月】



【5歳児 5月～7月】



④保育実践

【実践事例】 どうやったら水 流れるのかな? [2年保育 5歳児(19人学級) 6月]

<幼児の姿>

入園・進級当初より、砂場で型抜きをしたりまごど遊びをしたりしていたが、穴を掘っていたA児が、「化石発見!」「これ化石かも」と、底の方から石を掘り出し、興味をもった数名の幼児と一緒に化石発掘を楽しむようになった。穴を掘っていくうちに、「この穴つなげよう」「もっとつなげたら大きくなるかも!」と、それぞれが掘っていた穴を合体させ、どんどん大きくして遊んでいた。

保育の場面

◎幼児の姿 ・つぶやきなど (主体的・対話的な学び)	◎環境に関する視点 (物・人・時間・場)
<p>(6月8日)</p> <p>◎砂場で穴をつなげ、大きな穴をつくっていた。できた穴に水を入れ、“足温泉”として泥遊びを楽しんでいた。</p> <p>初めは2、3人が入って遊んでいたが、遊びが進むにつれ人数が増えてきた。</p> <p>A児「入れて」</p> <p>B児「いいよ!一緒にしよう!」</p> <p>①C児「じゃあ、みんなが入れるようにもっと大き しよう!」</p> <p>◎再び穴を掘り始めたが、大きくしたことで端まで水が届かなくなった。</p>	<p>◎化石発掘のときは、同じ世界観の遊びではあるが、個々に穴を掘って楽しんでいたように感じる。そこから4歳児のときに経験していた足温泉へと変化していくイメージの中で、友達と共通の目的をもった遊びになったように感じる。(人)</p> <p>◎遊んでいる全員が楽しむためにどうすればよいか自分たちで考え、場を整えようとしている。(場)</p>

B児「水が向こうまで行かなくなった」
C児「水が減ったのかな？もっと入れる？」
教師「なんで水が減ったの？」
A児「大きくしたから？」
B児「土の中に水が入ったんかもしれん！」
C児「ほんとや！掘ったらお水出てくるもんね！」

(6月9日)

○足温泉で遊ぶことを楽しみに登園し、昨日と同じようにバケツで足温泉に水を運び入れていた。樋を見えるところへ出すと、興味をもった幼児が自ら取りに行き、樋を足温泉へ向けて立てかけ、橋に見立てて遊んでいた。

D児「橋ができたよ！ここから水流そう！」

E児「分かった！いくよー！」

D児「あれ、水が流れん」

E児「なんでやろ？」

②樋の組み合わせ方を何度も変えながら水を流そうとしていたが、平らに並べたままだったり、砂場の縁が邪魔になったりし、うまく足温泉の方へ流れなかった。

教師「どうやったら流れるかな？周りに何かいい道具ないかな？」

E児「分かった！斜めにしたらいいんや！」

○E児は樋の下にバケツを置き、高低差を付けた。その様子を見ていた他児から「Eさんありがとう」と言われ、嬉しそうな表情をしていた。

(6月15日)

○これまでの遊びを思い出しながら、樋を取ってきて直線の橋に見立てて遊んでいた。

教師「もっとつなげたら楽しくなるかもよ？」

F児「じゃあ、ここにしたら2つ道ができるよ！」

G児「坂道つくったら楽しんじゃない？ウォータースライダーみたいなもの」

F児「いいね！やってみよう！」

○その後自分たちで意見を出し合い、水路を増やして遊びを続けていた。その様子を見て他の遊びをしていた幼児や4歳児も集まり、一緒に遊び始めた。

ウォータースライダーが出来上がると、4歳児が船や電車などの玩具を流して遊び始めた。中には玩具が大きく、うまく流れないことがあった。

◎教師の投げ掛けた言葉で、砂や水の不思議さに気付いたように思う。(人・物)



広くしたら水が
なくなるね

◎幼児が自ら選んで使えるように樋を用意しておくことで、足温泉に水を溜めるだけの遊びから、橋から水を流す遊びへと発展したのではないかと感じる。(物)

あれ？なんで
流れないんやろ？



◎幼児の様子を見守りながら、必要に応じて声を掛けることで、自分たちで周囲を見て考えながら遊ぶことができたのではないかと感じる。また、道具を組み合わせ使うことで遊びの幅が広がったように感じる。(物・人)

◎遊びが広がり、没頭してほしいという願いから、教師も一緒に遊びに参加することで、遊びが広がったり、幼児同士の新しい気付きにつながったりしたのではないかと。(人)

4歳「あれ？流れないね」
 教師「ほんとだね。なんでかな？」
 「Gさん、Fさん、魚が流れないって。どうしたらいいと思う？」
 G児「太い樋なら流れるんじゃない？」
 F児「こっちに替えてみようか」
 「これで流れた！流れるようになったよ」
 ◎片付けの時間までウォータースライダーでいろいろな玩具を流して繰り返し遊んでいた。
 (6月24日)
 ◎砂場で樋を組み合わせて、自分たちで考えたウォータースライダーをつくっていた。
 ◎A児「あ、ここから下にこぼれてる！」
 G児「これ(樋)の大きさがこっちは大きいけどこっちは小さいから流れないのかな？」
 F児「じゃあこっち(同じ太さのもの)に替えてみよう」
 E児「流れてもいいように下にはバケツ置こうよ！」
 F児「いいね！そしたら水こぼれないもんね！」
 ◎繰り返し遊ぶ中で、自分たちで気付いたことや、これまでの経験を活かしながら遊びを進めるようになり、遊びが盛り上がっていった。



◎何日も継続して繰り返し遊ぶ時間があることや、樋を選んで構成したりつくり替えたりすることができる環境があることで、遊びが深まった。(物・時間)



◎遊びながら共通のイメージや目的を持ち、思いを実現させるために、自分の考えを伝え合い、試行錯誤しながら繰り返し遊んでいる。(物・人・時間)

<学びの評価>

主体的・対話的な学び	
①	全員で遊ぶためにはどうすればよいかを考え、実践しようとしている。(自発性)
②	身近にある道具を使って、何度も繰り返したり試したりしながら、幼児同士で解決したり遊びを発展させたりしようとする姿が見られる。(持続性、粘り強さ・思いの伝え合い、共有・試行錯誤)
③	友達と相談しながら遊びを進め、トラブルがあったときには「こっちはどう?」「こうしたらいいんじゃない?」と意見を出し合いながら試行錯誤を重ねて遊ぶことで、自分にはなかった遊び方を知り、友達の思いを知ったり、よさを認め合ったりしながら遊ぶことができている。(思いの伝え合い、共有・目的の共有、協力・試行錯誤)

<実践の評価> (共につくる環境)

時間を十分に確保することで、幼児が遊び込むことのできる環境へと変化し、自分たちで道具を選んだり組み合わせたりし、繰り返し修正をしながら試行錯誤を重ね遊ぶようになっていった。

「もっと水をいっぱいになりたい!」「もっと楽しいウォータースライダーを作りたい」という思いや目的に向かって、友達と言葉による伝え合いや協同性を高めながら遊び込むことができていた。

⑤姫路市立幼稚園自主研究会の開催 令和4年11月4日

- ・研究集録の作成
- ・公開保育、実践発表、講演（桃山学院教育大学 名須川知子 教授）

(3) 3年次（令和5年度）の取組

①2年間の研究を検証し、研究テーマを再考、共通理解
幼児教育の学びの価値を探る
～共につくる環境を社会につなぐ～

②講師招聘研修

○桃山学院教育大学 名須川知子 教授

- ・幼児教育の価値は、幼児が活動に参画することで生まれ、主体的・対話的に幼児と共につくる環境（人、もの、こと）や、幼児主導で目標に向かうプロセスにあり、その経験が学びにつながる。

○武庫川女子大学 吉井美奈子 教授

- ・幼児教育の価値として、将来どのような生活者になるか「姫路市学校園消費者教育指針」の体系図を参考に“目指す子供像”と保育の関連を検証するとともに、社会とつなげる保育を意識し、環境を工夫する。

③幼稚園での遊びや生活に幼児が参画する実践研究をする。

○共につくるドキュメンテーション“マークをつくろう”[5歳児（21人学級・9月中旬）]

マークなににする？

私もかきたい！

トイレのマークにしよう

〈紙のリサイクル〉

〈トイレ〉

〈手洗い〉

〈絵本棚〉

こっち向きでいいかな？

どんな絵本のマークにする？

あそこ見て！矢印あるよ！

出来たマークは保育室内外に掲示

〈教具室に入らない〉

「てを」だから次は「あ」！

【活動のプロセス】

『マークのずかん』という本を見ていた幼児たちが、「このマーク見たことある!」「幼稚園来る途中にあるで!」「お店で見た!」などと話す姿が見られたので、学級全員で見とみることにした。その後、全員で園内のマークを探し、園内だけでも個人マークや保育室の表示、AEDなど、身の回りにたくさんのマークがあることに気付いた。さらに話し合うと、マークには用途に合わせた絵があり、字が読めない人や外国人にもよく分かるためにあるのではないだろうかという結論にたどり着いた。幼稚園内には、個人のマークは多いものの、全体のマークはあまりないことに気付いたので、「どんなマークがあればいいかな?」「誰が見ても分かるマークはどんなマークかな?」と各グループで意見を出し合いながらマークづくりに取り組み、自分達で掲示した。

【考察】

園内に手作りのマークがあちらこちらに掲示してある。自分達で必要なマークを考え共につくった経験は、今後も日常生活の中で様々なマークを自然と目にする中で、「このマークはどんな意味なんだろう?」「何のためのマークなのかな?」と、考え調べたり、知り得た情報を誰かに伝えようとしたりするのではないかな。また、教師が幼児の興味や関心に着目し、幼児の発想や声を尊重することで、目的を達成した経験が幼児教育の価値につながっていると考える。これから生きていく幼児たちにとって、大切な学びの芽になったのではないだろうか。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

○主体的・対話的な学び

- ・幼児が遊び込むには、自分のやりたいことが十分に楽しめる「時間」や「物」、幼児の思いに寄り添って共感し、思いや考えを出し合える「人」(友達や教師の存在)が環境の要素として重要であることを再認識した。また、幼児が主体となって遊びや生活を進めることで、周囲と対話しながら考えたり試したりする必要感が育ち、学びにつながったと感じる。
- ・教師が社会とのつながりを常に念頭に置いたことで、園外の体験活動(ヤマサ蒲鉾工場見学・小学校へお遣い作戦など)の事前の話し合いにより、自分で商品を購入する、知りたいことを質問するという目的と期待をもち臨むことができた。また、事後の話し合いでは何をどのように伝達するかというテーマで、主体的・対話的な学びが得られた活動となった。

○共につくる環境

- ・ドキュメンテーションの作成では、幼児のつぶやきやその時々の疑問や発見などを聞き取り、写真と一緒に書き込み掲示をしていくことで、ドキュメンテーションを見ながら遊びや活動を振り返り、次の遊びや活動に対する期待感や見通しをもつことができた。また、教師が作成するのではなく、幼児と共に学級で話し合いながら作成することで、幼児の思いや考えを言語化し、視覚的に示すことができた。

○幼児教育の学びの価値

- ・教師が幼児の興味や関心があることを見逃さず、幼児と共に考えながら気付きや発見したことを伝え合い、学び合える環境を整え、幼児主体で活動できるように援助することが重要であると分かった。そして、幼児が参画した園生活を通して得た学びや経験は、個々の学びとなり、幼児教育の価値であると考ええる。

(2) 課題

- 幼児の興味関心を支えつつ、様々な環境と出会う機会を意図的に計画することが大切であることを踏まえ、教師は、幼児と共につくる園生活が、未来の生活につながること、地球全体につながることを意識し、ふさわしい園生活を自問し研究を続けたい。
- 幼稚園で協同的な遊びを通して培ったやる気や自信が、小学校の学習に意欲的に取り組む態度につながってほしいと考える。主体的・対話的で深い学びの連続性を保障する観点から、幼小の教職員が子供の姿を共有する機会をもち、接続期のカリキュラムを共に考えていきたい。
- 園外保育や飼育栽培活動を通して自然に興味や関心をもつこと、また日常生活の中でゴミの仕分けや物を大切にすること、周りの人に思いやりの気持ちをもつことなど、幼児期におけるSDGsを考えていきたい。幼児期の体験が、将来的に持続可能な社会の創り手への一歩になることを期待し、さらに様々な経験を共に積み重ねていきたい。

5 参考文献

- 『幼稚園教育要領解説』（フレーベル館）
- 『ワクワク！ドキドキ！が生まれる環境構成』岡上尚子（ひかりのくに）
- 『「語り合い」で保育が変わる』大豆生田啓友（学研）
- 『子どもと保育者でつくる育ちの記録』北野幸子（日本標準）
- 『園行事を子供主体に変える』大豆生田啓友（チャイルド社）
- 『子どもが中心の「共主体」の保育へ』おおえだけいこ（小学館）